

平成 28 年 8 月 8 日

あきる野市議会議長殿

会 派 名 あきる野市議会自民党
代表者名 奥秋 利郎

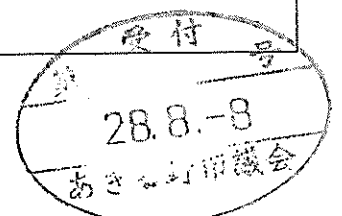


会派の（ 調査・研修）報告書

このことについて、下記のとおり実施したので報告します。

記

1 調査研究または 研修実施日	平成 28 年 7 月 3 日（日） ～ 平成 28 年 7 月 5 日（火） 2泊3日	
2 調査研究または 研修場所	7月3日	移動日
	7月4日	島根県隠岐郡海士町 交流促進課
	同 日	同 上 西ノ島町「隠岐島前病院」
	7月5日	鳥取県境港市役所
3 調査研究事項 または研修名	海士町	定住対策と自立促進プラン
	隠岐島前病院	病院の経営方針と総合医療と 地域医療と包括ケアシステムの構築
	境港市	「伯州綿」の商品開発と付加価値商品
4 参加者指名 （ 1 名 ）	奥秋 利郎	
5 調査研究または 研修の概要 及び感想	別紙のとおり	



海士町視察報告書

概 要

島根県隠岐郡海士町、昭和25年頃の人口は7000人弱、平成22の国勢調査では2400人弱で、世帯数1052世帯、高齢化率39%、面積33.5平方キロの小さな島です。

平成14年の町長選挙、地縁血縁を否定した町民の選択、まず職員の意識改革。年功序列を廃止して適材適所主義に再編する。

ある日突然のように三位一体の改革による「地財ショック」が襲い徴税にも匹敵する地方交付税の大幅な削減は島の存続さえも危うい緊急事態に直面し、当時のシュミレーションでは平成20年度には確実に「財政再建団体」への転落の危機が予測された。

- ※ 生き残るための守りの戦略（徹底した行財政改革）を断行した。町長が「自ら身を削らない改革は支持されない」の信念で給与カットを宣言すると管理職が続いてカットを申し出る、そして議会からも始まり職員組合からも自主カットの申し出があった。「先憂後楽」の精神は基本姿勢であるとのこと、平成17年度の人件費の削減効果は、約2億円であり、ラスパイレス指数は72.4%全国最低値となった。18年度もそのまま続行するも、19年度には収支バランスは改善されたことから職員の給与カットは5%還元し、その後少しずつ改善していった。
- ※ 攻めの戦略は地域資源を活かし第一次産業の再生で島に産業を創り、島に人を増やし、外貨を獲得し島を活性化する。成長を島の外に求める。
 - ・シマブランドの立ち上げで先駆的な産業興しに取り組み、「島じゃ常識！さざえカレー」島の食文化を商品化してヒット食品となる
 - ・商品開発研修生（よそ者の発足と視点で、特産品開発とコミュニティづくりに至るまで海士にあるすべての宝の山を商品開発に挑戦、毎月15万円の給与、LDKの住居を家賃1万円で、今日まで25人参加、現在3人が勤務中、で海士町に定住したもの7名になった。
 - ・第2弾は種苗から一貫生産を目指し、U・Iターン者と地元漁協が協力し、岩がき「春香」の養殖に成功し、脱サラIターンの仕掛けにより築地市場へ出荷、最高値を付けた。岩がき養殖に参加した都会からのIターン者7名が移住した。
 - ・CAS (Cool s Alive System) の新しい冷凍システムを導入し特産の白イカを築地市場へ納入している。
 - ・隠岐の黒毛和牛、島の牧草は海からの潮風が年中吹くため、ミネラルが豊富で急峻な山野を移動しながら育つため足腰が強く、骨格と胃袋が丈夫で病気にかからない、これまでは子牛のみが生産され神戸牛、松坂牛となって市場に出ていたが、素質の良い隠岐牛を繁殖から肥育まで一貫した生産、販売をすることでブランド力を高めた。
担い手になりたい都会からのIターン者は、この隠岐牛生産に3家族が移住した。
 - ・その他「黒もじの木」で作る、ふくぎ木茶、海の塩、隠岐産干しナマコのブランド化による中国への輸出等々、産業振興策など島暮らしの運動を展開した結果、326世帯483人のIターン者が海士町に定住し総人口は増えないが、活力人口が増えたことにより人口構成のバランスが良くなった。

感 想

最後尾から最先端へ活力ある持続可能な島を目指し、大胆な行財政改革を行う一方、島まるごとブランド化、海、潮風、塩の3つをキーワードに試行錯誤でとりくんだ。産業施策と定住施策がうまく連動して、その効果が表れていた。

未来を支える人づくり、そして小さな島で日本一の教育を目指すなど、熱い思いにも感動した。

隠岐広域連合立「隠岐島前（どうぜん）病院視察

概 要

隠岐の島は、島前地区（人口6,117人）と島後（どうご）地区（人口14,759人）から成り立ち、隠岐島前病院は島前地区（西ノ島＝西ノ島町3,161人）、中ノ島（海士町2,350人）知夫里島（知夫村606人）の3島を担当している広域連合病院である。

島前地区の3島（2町1村）には診療所はあるが開業医はいないため、3島の中核医療機関として昭和57年に島前町村組合立島前診療所が設立され平成13年に当外該診療所を増改築して44床の入院可能な隠岐島前病院となり地域の医療に貢献しています。

※隠岐島前病院の概要

- ・院長－白石吉彦（第2回日本医師会赤ひげ大賞受賞）
- ・建物－鉄筋コンクリート造3階建て、3,442㎡
- ・病床－44床（一般6室・20床・療養型6室・24床）
- ・科目－内科、外科、小児科、眼科、耳鼻科、精神科、産婦人科、整形外科。
- ・職員－医師6名、看護師33名、看護女子8名、薬剤師1名、作業療法士3名、理学療法士4名、臨床検査技師1名、管理栄養士2名、医師作業補助員3名、調理員8名、事務員14名、警備員3名
- ・機器－ヘリカルCTスキャン、超音波診断装置、内視鏡（胃、十二指腸、大腸、）レントゲン、手術器具、生化学分析装置、人口呼吸器、電子カルテ、監視用モニター、遠隔画像診断システム、PACS。
- ・患者－外来120.9人／日、入院38.7人／日（病床利用率：88.9%）

※感想

離島の44床という小さな病院経営に際し「めざせ！日本一の地域医療」の合言葉の下、人と人とのかかわりを大切にし、自分に合った自分らしい医療、看護等々、医師看護師を含む全職員の気迫あふれる姿勢に感動した。

自治医科大学出身の白石吉彦院長は「当初とりあえず3年間、僻地医療にあたってみようと島前地域での島民に評価されている。地域医療にかかわっているうちに気がついたら18年が過ぎていた」と語っていた。その笑顔に尊敬の念を強く抱いた。



視察研修後、白石院長を囲み記念撮影

鳥取県境港市伯州綿視察

概 要

人 口 35,259人平成22年度

面 積 29.02平方キロ

日本海側の有数な漁港の中でトップクラスの漁港として栄え、漫画家水木しげるの故郷で知られ作品のキャラクターの彫刻を配置し、水木しげるロードと称した観光用メインストリートに仕立て上げ、賑わいを見せている。最近では国の観光客誘致により当市にも大型クルーズ船が寄港し、昨年は40回も入港し、中には16万トンもの超大型クルーズ船が寄港するようになり商業港としての色合いもを見せている。

今回の視察は江戸時代前期より続く「伯州綿の商品開発と付加価値商品」の研修を行った。

※伯州綿の概要

300年以上前この伯耆の国（鳥取県西部、島根県東部地方）いわゆる伯州綿として栽培されていた。北前船により全国に送り出しブランド化していき、鳥取県の経済を支えていた。

明治29年（1896年）関税撤廃により安価な外国産が台頭し次第に国産綿は衰退していったが、「弓浜緋」の原料として細々と、地域で栽培は続けられていった。

こうして市内、弓浜半島で栽培されていた在来種の和綿を復活させるため、平成20年耕作放棄地（500㎡）を利用して、境港市農業公社が「伯州綿」の栽培を始め、翌年平成21年には栽培面積を10,000㎡に拡張し本格的に取り組みを開始し、現在では20,000㎡となった。科学肥料は使わず有機農業に徹し、良質な綿が栽培されるようになった。

※栽培体制

栽培管理が楽であり、肥料は少々で済み、肥料代もいらず、軽量作物で高齢者向けであるが農家への奨励は販路が不透明であり、農家向けには奨励は困難であるため、市では平成22年に「伯州綿栽培講座」を開始し人材発掘し、23年には「栽培サポーター制度」を導入し、子供たちの体験学習栽培、グループ、家庭栽培等市民に広く呼びかけ、収穫した綿の買い取り制度を確立し、現在1kg 当たり1,500円で購入している。

※商品と加工販売

こうして生産された面は、新生児誕生の際、市からのお祝い品として「おくるみ」を、百歳のお年寄りには「ひざかけ」を贈呈し好評を得ている。

しかし商品化に向けては短繊維のため加工にも課題が多く、市場性に欠けている面があるが、かつての「弓浜かすり」の復活に期待するところです。

※感想

7月3日に米子を出発したJR堺線に乗車した時からびっくりした。車両は内外とも鬼太郎だらけ、空港の名前も、「鬼太郎空港」水木しげるの生家は北前船で知られる江戸時代の豪商だったとのこと、当時の特産品として北前船が運んだ良質の白州綿の復活を目指し、科学肥料を使わない、有機肥料に徹した良質の綿の栽培に努力が感じられたが、高級品としての生産がどれほどの可能性があるのか課題でもある。